Book Review 28-5 SF ＃カタストロフ・マニア

『＃カタストロフ・マニア』（島田雅彦著）を読んでみた。
著者は東京外国語大学ロシア語学科卒。1983 年『優しいサヨクのための嬉遊曲』を発表し注目される。1984 年『夢遊王国のための音楽』で野間文芸新人賞、1992 年『彼岸先生』で泉鏡花文学賞、2006 年『退廃姉妹』で伊藤整文学賞を受賞。

著者は、本書を災害文学と位置付けている。「今、われわれはサイボーグ化していて、『現実を生きている』という自覚は希薄になっている。高度資本主義下で負け組とされ、いいように飼い慣らされていた者たちの覚醒と自由の発見を謳う叙事詩として迫ってくる。今はネット情報を鵜呑みにしがちで自分で深く考えない（思考停止の奴隷状態）。災害時のように環境が激変した時は別なのだと。人間本来の好奇心、何かを疑うこと…といった無駄に思えることこそ生存の役に立つのだ」と。

さて、舞台は 2036 年。落ちこぼれの 26 歳のゲーマーの主人公 M（もっぱらカタストロフのゲームで、国家や文明を滅亡させる日々）が、友人への借金返済のためとある治験バイトを受ける。その内容は（あとで判明するのだが）、新型（ボトルネック）ウイルスへの抗体作成を促す治療のようだ。治験の間は冬眠させられる。なんとその間に世界が太陽のコロナ質量放出と新型ウイルスのパンデミックで滅亡しているのである。政府は無策で国民に何もしてくれない。この先どうなるかという物語である。この物語は、コロナ禍（2019 年）以前に発刊されている。予言性があるということだ。「最後の一人になっても、頑張ってくださいね」という女性看護師が残した言葉を反芻しながら、原始化した世界で主人公 M は悪戦苦闘するのである。

デストピアの中で、人はどう生きるのか、問われている。

これまで、Book Review でデストピア小説を何度か取り上げてきた。＃オーウェル『1984』を漫画で読む、#破滅の王、# 侍女の物語/誓願、＃AI 監獄ウイグル、等。関心のある方は、参照してほしい。

パンデミックを予言した書・映画としては

小松左京氏が 1964 年に発表した SF 小説『＃復活の日』。感染者の 70％に急性心筋梗塞を引き起こし、さらに残りも全身麻痺で死に至らしめるウイルス「MM-88」が人類に襲いかかるという物語だ。

高嶋哲夫氏が 2010 年に発表した小説が『＃首都感染』。

2011 年に公開されたスティーヴン・ソダーバーグ監督の映画『＃コンテイジョン』。未知の感染症の世界的流行を描いた（私はコロナ禍で学生教育に利用した）。

コミックでは、1995 年の作品である『＃病原体・レベル 4』がある。ゴルゴ 13 がクルーズ船の中で新種のエボラウイルスに感染し、自ら血清を作り出して窮地を逃れる話（ダイヤモンド・プリンセス号を連想させる）。コロナ禍で三密を避けるためマンガ制作を一時中断せざるを得なかった時、掲載誌のビッグコミックは 26 年前のこの作品を再掲載し、ＮＨＫで取り上げられるほど話題になった。
実は『＃病原体・レベル 4』と 1995 年の 3 月に公開された映画『アウトブレイク』（ウォルフガング・ペーターゼン監督、ダスティン・ホフマン出演）は原案（リチャード・ブレストン著『＃ホット・ゾーン』）が同じということらしい。

現在、松前地区では週に 2 から 3 名の感染者が出ている。これ以外にいつ再出現するかわからない新興感染施症にも今後は怠りなく備えなければならない。